令和5年度那珂市地域おこし協力隊成果報告会レポート

令和6年3月8日（金）、那珂市役所にて「令和5年度那珂市地域おこし協力隊成果報告会」を実施しました。

地域おこし協力隊とは、地方自治体からの委嘱を受けて、住民票を移しその地域で生活しながら、地域外の視点やこれまで培ってきたスキルを生かして、地域で活動する人材のこと。

那珂市では、令和2年度に1期生が着任して以来、隊員それぞれが各々のミッションに基づき、地域活性化に挑戦してきました。

本記事では、令和5年度の4名の協力隊員による成果報告会の様子をご紹介します。

地域に活力と刺激を与える存在になってほしい（先﨑光市長）

協力隊員による成果報告会に先立ち、先﨑光市長から開会のご挨拶をいただきました。

先﨑市長が那珂市の市長として就任されたのは今から5年前。那珂市は都市部へアクセスも良く、水戸市などのベッドタウンとして発展してきた住みやすいまちですが、つぶさに見ると、地域課題は山積していました。

そんな課題を解決しながら、地域を盛り上げたい。先﨑市長はそんな思いの中で「地域に刺激を与えてほしい」と協力隊制度を導入したそうです。

コロナ渦中で始まった1期生の活動でしたが、協力隊発案の企画「ドライブスルーマルシェ」が実現したことで、地域に活力と刺激をもたらしてくれたといいます。

「地域にとってプラスになるように、これからも協力隊の力を生かしてほしい」と力強いメッセージをいただきました。

那珂市地域おこし協力隊員4名による成果報告

農業における「作業」は、ほんの一部。その奥深さを知った一年（兵藤一輝隊員）

発表1人目は、新規就農プロジェクト担当の兵藤一輝（ひょうどう・かずき）隊員。

就農型の協力隊として2年目を迎えた兵藤隊員は、今年度を「自分の力を試す、実践の一年だった」と振り返っています。

株式会社綿引農園の協力のもと、トマトの実践栽培研修を受けた兵藤隊員は、ハウスの建設から種蒔き、収穫、出荷、販売まで全ての工程に取り組みました。
兵藤隊員が栽培したトマトは、市内の直売所2カ所で販売し、全て完売。また、市内の農業者団体・フェルミエ那珂が主催する「いぃ那珂マルシェ」にも毎月参加し、地域の中に溶け込んでいきました。

さらに、瓜連中学校で行われた、自分たちで栽培した野菜を使い、郷土料理・七運汁（ななうんじる）を作るプロジェクトでは、野菜栽培部門で中学生をサポートするなど、農業という軸で、幅広く活動されています。

農業に携わって丸2年、その難しさを奥深さが身にしみて感じたという兵藤隊員。

「農業経営において『作業』は、ほんの一部であるということを感じました。何をどう作り、どのように販売するのか。『作業』以外のことを前もって計画し、状況に合わせながら落とし込んで進めていかなければなりません。到底2年で全てを理解できたわけではありませんが、農業について改めて考えさせられた一年でした。ただ教わった通りに作業するのではなく、自分で考えて行動することで、農業経営のシミュレーションができたと思います」と話されています。

大変な作業にも率先して取り組む。創意工夫をしながら、技術習得を目指す（松田健志隊員）

発表2人目は、兵藤隊員と同じく新規就農プロジェクト担当の松田健志（まつだ・けんじ）隊員。干し芋の美味しさに魅了された松田隊員は、サツマイモ栽培と干し芋生産者として独立を目指し活動されています。

協力隊1年目の今年度は、株式会社芋助で農業研修と干し芋生産業務に携わり、知識や技術の習得に力を入れてきました。

芋助では、春の圃場整備から苗づくり、苗植え、夏の除草作業、秋の収穫作業、冬の干し芋生産作業と干し芋製造の技術など一通り学んだのだそう。

農家として独立を目指す松田隊員が心掛けた点が2つあります。

1つ目は、地域に馴染み、信頼してもらえる人材になること。どんな経験も糧になると信じ、大変な仕事も自ら率先して取り組みました。

2つ目は、創意工夫をして、作業を効率化できないか考えること。農業はとても大変な仕事ですが、大変なままにするのではなく、少しでも労力を減らすために、手順を変えてみるなど、状況に応じて松田隊員なりに工夫を凝らしていたのだそう。このような積み重ねが将来に役立つと考えられています。

松田隊員からは、芋助の社長と専務へ感謝の気持ちとともに「大規模な生産を行うには多くの人手と相当な額の投資が必要。来年度はさまざまな生産者の方にお話を伺いながら、自分にとってどの規模で取り組むのがベストなのか検討していければと思います。地域に馴染みながら、農家として独立できるよう、挑戦と努力を続けていきたいです」と力強い言葉で締めくくってくれました。

イベントが続く仕組みづくりを。地域住民の持つ力が最大限に発揮されることが嬉しい（八子結奈隊員）

発表3人目は、静峰ふるさと公園でのイベント企画・PRを担う、パークビジネス活性化プロジェクト担当の八子結奈（やこ・ゆうな）隊員。

コロナ禍での協力隊延長制度を利用し4年目を迎えた今年度は、公園での新しいイベント企画と運営だけでなく、パークコーディネーターがいなくなったとしてもイベントが続く仕組みづくりをしたいとイベントプレイヤーの誘致に力を入れてきました。

八子隊員が実施した主なイベントは3つ。子ども向け自然体験教室「コドモクエスト」や公園の隣にある静神社に飾られた三十六歌仙絵をパネルで紹介する「三十六歌仙絵パネル展」、子ども服のおさがり交換会「あおぞらクローゼット」などです。

どのイベントも、運営の大枠は八子隊員ですが、将来的には地域住民やプレイヤーのみで運営できるようサポートに注力してきました。

また、八子隊員がもう一つ力を入れているのは、協力隊着任と同時に開設した公園のSNSアカウント。開設当初はほとんどいなかったフォロワーも今では1600まで増えました。イベント集客の面でとても役立っているそうで、これからも充実したアカウント作りを続けていきたいとのことです。

最後に、地域住民への深い思いと感謝の言葉を伝えてくれました。

「一番やりがいを感じるのは、地域住民が持っている力をイベントで発揮してくれたときです。イベントの成功は、誘致したプレイヤーの活躍と来園者の喜ぶ姿を見れた瞬間だと思っています。地域住民の底力と公園のある瓜連地区の人たちからのパワーで、4年間楽しく活動することができました。これまでいただいたご縁を大切にしながら、皆さんに恩返しできるよう、最終年度も頑張りたいと思います」

ご縁をつなぐ、コミュニティマネージャーという仕事。地域住民の「やりたい」を支援して（支倉泰司隊員）

最後の発表者は、協力隊3年目・最終年度を迎えた支倉泰司（はせくら・やすし）隊員。

支倉隊員は、創業支援やサテライトオフィス、コワーキングスペース、移住相談窓口を備えた「いぃ那珂オフィス」でコミュニティマネージャーとして活動されています。

コミュニティマネージャーは、地域住民の「やりたい」を形にする仕事だと語る支倉隊員。

そんな支倉隊員は、現在も東京都で飲食店を経営しながら、那珂市で協力隊として活動する異色の経歴の持ち主でもあります。

そんな支倉隊員がこれまで培ってきた経験と知識が大いに役立ち、地域に根差したビジネスプロジェクトの立案をサポート。

定期的に開講した「小商い寺小屋」では、事業やイベントの始め方などを受講者に伝えてきました。

シニア向けの「パソコン・スマホなんでも相談会」や「こども夏休み絵画作成教室」、「がんばるママに癒しの時を Happy Mother's Day」など、小商い寺小屋発の企画も多数生まれています。

今後は、さまざまな地域課題をビジネスで解決することで、関係人口の創出に尽力していきたいとのこと。

最後にこの3年間を「イベントや講座の運営をする上で、講師を探すことや通年を通して集客するのが難しいと感じました。それでも、これまでの縁やつながりで活動できたと思います。コミュニティマネージャーという仕事は、縁をつなぐ人だと考えています。プレイヤーではなく、あくまでもマネージャー。プレイヤーを探せる力があるかどうかが鍵です。さまざまな情報にアンテナを張っておくことで、縁をつなぐ人になれると思います。失敗を恐れず前を向いて取り組めた3年間でした」と振り返ってくれました。

4名の協力隊員による発表を終えて、玉川明副市長から「那珂市の課題を解決するとともに、協力隊の夢を叶える・応援する仕組みでもあると思います。今後も相乗効果が生まれ、お互いに良い関係になることを期待したいです。皆さんの夢ややりたいことを遠慮なく伝えていただき、那珂市として精一杯応援していきたいと思います」というお言葉をいただきました。

今後の新たな可能性を探る、協力隊員との座談会

協力隊員からの成果報告の後は、今回の報告会に参加してくださった参加者との座談会を実施。座談会後、どんな意見交換が行われたのか発表を行いました。

兵藤隊員のテーブルには、行方市で就農を目指す協力隊や常陸太田市の農家の方などが集まりました。まず出された意見は、那珂市の協力隊はメンバー同士のコラボレーションが生まれていることが素晴らしいということ。その背景には、行政職員のサポートやバックアップ体制がしっかりしているからなのではないかという話にもなったそうです。

また、農業経営については知識が必要なので、今後も知識をたくさんつけていきたいと語る兵藤隊員。その一方で、長年農業に携わる方は、これまでの経験をもとに栽培する方も多く、知識と経験のバランスが非常に大事なのではないかという意見も出されました。

松田隊員のテーブルでは、常陸太田市で梨農家として独立を目指す協力隊や県北地域で映像クリエイターとして活動する協力隊、芋助の社長・専務と意見交換を行いました。

「縁のない土地からやってきた若者が農業を続けていくためにはどうしたらいいのか」という話で盛り上がった松田隊員との座談会。「信頼を作り地域の中に溶け込むことが大切だと思う」という意見に加えて、サラリーマンから農家へと転身した芋助の皆さんからは「若者には力がある。夢と目標を持って一生懸命取り組むことが大事」という熱いメッセージが。
また、映像事業を行う協力隊がいたことで、農業も他業種と交わり合い、ホームページの見直しやSNS運用など、広い視点を持つことが大事だという意見も得られました。

八子隊員との座談会では、今後、公園でのプレイヤーや協力者を誘致したいという八子隊員の思いに一致するようなメンバーが集まりました。メンバーは、市内芳野地区で野菜の卸売を行う方やカメラマン、城里町で観光・ふるさと納税の振興を行う協力隊など。

その中で、芳野地区と連携したイベントの提案や八子隊員自身がイベントの記録をしているものの、なかなか手が回ってない現状から「撮影に来てほしい」といった案も出されました。八子隊員の来年度の活動に繋がる座談会になったのではないかと思います。

支倉隊員との座談会では、コミュニティマネージャーとして活動する中で、「そもそもコミュニティマネージャーの理想的なあり方やその形は何か」を改めて考えたのだそう。

自分自身が楽しく仕事をしなければ、周りも楽しめないという基本的な部分に立ち返ったり、協力隊として着任する前後でどんなギャップあるかを考えたりして、この経験をどのような形で次に生かしていくかを皆さんと考えられた良い時間となったようです。

それそれが今後の新たな可能性を探る座談会になったとともに、先﨑市長や玉川副市長も座談会に耳を傾け隊員と意見交換するなど、非常に有意義な時間となりました。

最後に、各隊員からお世話になった地域の方や市役所職員に向けて御礼の言葉をもって、成果報告会は終了となりました。

令和5年度をもって退任する隊員、来年度も活動を継続する隊員がいますが、これからもそれぞれが理想的な形で那珂市との関わりを持ち続けていくと思います。

今後とも、那珂市地域おこし協力隊を応援するとともに、その活躍にご期待いただければと思います。

-

令和5年度那珂市地域おこし協力隊成果報告会

日時：3月8日（金）15:00-17:00
会場：那珂市役所5階　502～504会議室

内容：協力隊の活動報告、座談会
登壇者：兵藤一輝隊員（新規就農）、松田健志隊員（新規就農）、支倉泰司隊員（コミュニティマネージャー育成）、八子結奈隊員（パークビジネス活性化）
参加者：46人（うちオンライン参加者7人）

主催：那珂市
運営：株式会社えぽっく・一般社団法人　自由と地図